



第107号  
北海道教育大学  
青陵会

(北海道教育大学岩見沢校同窓会)

会長 早瀬 公平

印刷 北海道社会福祉事業団福祉村  
(TEL 0126-45-2300)

〈題字は岩教大、藤根信章元教授の揮毫によるものです〉



- も ○巻頭言…1
- 退職支部長からのメッセージ…2～3
- 支部だより…4
- く ○卒業生代表のことば…5
- 各学科の活動状況…6～7
- じ ○事務局便り…8

心  
模  
様

北海道教育大学青陵会 副会長 近田 勝信



春の息吹を感じる頃  
となりました。全国の  
会員の皆様には、まず  
まずご健勝にてお過ご  
しのことと存じます。

さて、およそ一年前に発生した新  
型コロナウイルスは未だに収まる気  
配はなく、私達の身の回りはもとよ  
り、日本中がそして世界中が翻弄さ  
れています。

この広報が届くころには、ワクチ  
ン接種も始まり収束に向けて期待さ  
れるところです。このコロナ禍で、  
私達は人間の弱さや愚かさを改めて  
思い知らされたのではないでしょう  
か。昭和五十六年、我が国の死亡原  
因は、それまで約三十年間第一位だっ  
た「脳血管疾患」から「癌」に変わり現  
在に至っています。その頃、医学界  
からは、将来「癌」は克服できる疾病  
であり、それよりもこれからの時代  
は「感染症予防」が最重要であるとの  
警鐘がありました。私達は、これを  
どれほど真剣に受け止めたのか反省  
の思いです。近年の阪神大震災や東  
日本大震災さらに全国各地の集中豪

雨などの自然災害への備えも同様に  
思われます。また、コロナ禍の対応  
についても、現場を顧みない学校一  
斉休校、非常事態宣言の発出とG O  
T Oキャンペーンの矛盾、専門家依  
存の責任回避姿勢など、一国を  
牽引するリーダーシップの不甲斐な  
さには呆れるばかりでした。しかし、  
これを補い支えたのは全国の医療や  
学校の関係者はもとより、利他の心  
のある多くの市民でした。これは日  
本人の誇りであり、いつの世も大切  
にしていきたいものであります。

次に、我同窓会を見ますと、令和五年  
に「創立百周年」を迎えます一九二三  
年に庁立実業補習学校教員養成所と  
して開校以来、約一万三千余名の卒  
業生を輩出し、教育界、芸術界、スポー  
ツ界において大いに活躍しております。  
平成二十五年に開催された創立九十  
周年式典は、約四百名の参加で盛大  
に開催されました。百周年では、これ  
を超える参加者が一堂に会して、歴  
史の大きな節目となる記念すべき周  
年事業となることが期待されてお  
ります。会員の皆様には、式典・祝う会

に是非とも参加していただきますと  
共に百周年事業に多大なご協力をい  
ただけますようお願い申し上げます。  
一方、大学では学生も先生方もこ  
の一年間はオンライン授業で並々な  
らぬ苦戦をしております。いつもな  
らキャンパス内での深淵とした姿が  
まばゆいのですが、行き交う学生も  
まばらです。後期に入つてすぐの頃、  
三人の学生が廊下をきよろきよろし  
ながら歩いていました。聞けば、入  
試以来初めて登校した一年生でした。  
当然、同期生の顔も見たことないと  
のことです。また、本学特有の練習  
室から聞こえる楽器の音も元気があ  
りません。最近では、授業によっては  
対面授業もできるようになったよう  
ですが、学生には大学時代ならではの  
青春が謳歌できるようになる日を  
待ち望んでおります。

高度情報化の進展は目覚ましく、  
情報機器を活用したコミュニケーション  
の取り方は様変わりしました。し  
かし、そのような時代だからこそ、人  
間のもつ本性がさらけ出せることが  
極めて大切だと考えます。「目と目を  
合わせて、膝を突き合せて、腹を割つ  
て話し合える」、大学ではこんな友が  
できました。会員の皆さんも学生の  
皆さんも心通い合う仲間として、ま  
ますお元気で過ごしてください。

# 退職支部長からのメッセージ



自分を育ててくれた  
青陵の先輩に感謝  
胆振支部長  
古瀬 達郎

毎年冬になると、岩見沢の雪の多さを伝えるニュースを見るたびに、小学校から大学までを過ごした街を懐かしく思い出します。大学当時の私の研究室は「教育」、部活動は「体操部」、冬は「スキー」ばかりしていました。でも、その経験が、教員になってからも、さらに管理職になってからも大きな糧となっていることを今、改めて感じています。

平成十一年、私は現在校でもある登別小に勤務しており、青陵の先輩であった当時の校長先生、教頭先生からの強い勧めもあって、教頭試験を受けることになりました。平成十二年、三十九歳で教頭となり、その後、教頭として五校十三年、校長として三校八年を務めて参りました。胆振支部の活動は、例年五月の総会に始まり、その後、三回から五回ほどの研修会、一月の勇退激励会という流れが、会員が一堂に会する機会となつていきます。

特に私が教頭になった頃は、泊まり込みの合宿もあり、論文研修のみならず、毎年講師としてお迎えしてい

た平川先生から管理職として学校を運営・経営していくための多くのことを学ばせて頂いたことは忘れられません。まさに「研修の青陵」と胸を張つて言える研修会でした。また、総会や激励会では、OBの先輩方から多くの励ましの言葉を頂き、学校での実践の大きな力となりました。

私は、平成二十六年から昨年度までの六年間、支部の研修を担当させて頂きましたが、当初思い描いていたような活動ができず、反省点ばかりが思い起こされます。

さて、二年前の四月、かつて十二年間務めた登別小学校に今度は校長として着任。当時の教え子たちが親となりPTAや地域の中で活躍している姿に、懐かしさを感じながら、最後の勤務校としての二年間が始まりました。校長になってからは、自ら学び、見識を広げるため、とにかく本を読むように心がけています。気が付くと校長室には「教育学」に類する本がずらり。学校を離れても地元のスキー連盟の業務も多々あり、岩見沢で学んだことが今に繋がっています。コロナ禍の今、先の見えない日々が続きますが、自分を育ててくれた青陵の皆様へ感謝し、また会える日を楽しみにしています



初任の当時は振り返り  
オホーツク支部長  
木村 誠

時代は「平成」から「令和」へ、先日「大学入学共通テスト」が実施されました。思い返せば、私たちは「共通一次試験」の一期生でした。大学の入試制度も「大学入試センター試験」へと様変わりし、今年から「大学入学共通テスト」。改めて時代の移り変わりを感じます。

昨年度の道中研究大会は岩見沢市での開催でした。久しぶりの岩見沢駅周辺は随分と様子がちがっていましたが、「三船」は健在でした。我が学び舎にも立ち寄りさせてもらいました。九月の下旬だったこともあり校内はひっそりとしていましたが、正面の校舎は在学当時の面影をそのままに残しており、感慨深いものがありました。学生だった当時のわたしは、正直、真面目な学生ではありませんでした。けっこう講義もさばりましたし、学外に遊びに歩いていました。なんとか四年で卒業でき、「合格できたように感じます。」私が採用された昭和六十二年は、まだ中学校は「荒れた」時代でした。私の役割は、何かあったら一番に駆けつけてその場を落ち着かせる（鎮める）ことでした。どうしてもい

ことを聞かない生徒もいましたが、体を張って抑えつけたものです。おかげでよくメガネを壊しましたね。安月給の初任者にとってはなかなかの出費でした。

若かったころの思い出と言えば、「部活動」ですね。大学時代は卓球部に所属しており、メンバーに恵まれたこともあり、インカレにも出場しました。そんな経歴から卓球部を指導していました。

今でこそ卓球はメジャーなスポーツになりましたが、当時は運動が苦手な生徒の受け皿でした。最初のころは「どうせやってもだめ」と努力することを拒んでいましたが、少しずつ成果が出始め、「自分もやればできる！」と、生徒の変化を感じられるようになってきたころに転勤！次の任地でも同じように学校という畑を耕して種をまく、実りを期待しつつも、収穫前に転勤。その繰り返しでした。でもそういった生徒の変化を感じられたことが、一番の幸せであるように思います。

「教育とは子どもたちを変容させること」誰が言ったことか覚えていませんが、目標に向かって変わっていく子どもが一人でも増えていくことを願っています。



いつかお礼を

高・特・大支部長  
古瀬 径 二

私は、昭和五十五年四月、共通一次試験の初回と二回目を経験し、岩見沢分校小学校教員養成課程に入学し、五十九年三月に卒業しました。

私が過ごした四年間は、中学校教員養成課程からの改組のさなかにあつたためか、講義内容も学生の雰囲気もキャンパスも新旧が混ざり合い、混沌とした特殊な時期であつたことになりました。

ある授業は、古いサークル棟の机のように角のとれたものであつたり、ある授業は、新築のコンクリート校舎の壁のように角の立ったものであつたりしました。

大学だけでなく、岩見沢の街も変化のさなかであつたように思います。人の流れは駅前商店街の金市館や丹崎屋デパートから、四車線化したバイパス沿いのダイエーに移りつつありました。

そんな変化の中でも、変わらぬ岩教大の精神があり、そのおかげで、私は、まがりなりにも三十七年間、国語教員として、管理職として、計九校の高校を経験させていただくことができたのだと思います。

私をはじめてその岩教大の精神に出会つたのは、入学してひと月ほどこと、配属された国語国文研究室は本館の四階にあり、私はいつものように誰もいないトイレの個室で窓から中央ローンを見下ろしながらこれからのあれこれを夢想していました。

現実に戻ると同時にトイレトペーパーが無いことに気づき、私はうろたえました。助けを呼ぼうにも人の気配はありません。なんとかしなければとあせる私の眼に、突然、窓の枠に刻まれた小さな文字が、ある意味を持つて飛び込んできました。

「神に頼るな 運は手で掴め」

それまで何度もその言葉の前に居たはずなのに……。天啓とはかくやあらんという驚きに震えるとともに、岩教大生かくあるべしとの精神を学んだ瞬間でありました。そして、あのこの大学に入学してよかつたなと思う瞬間でありました。

以来、いかなる難局も自らの力で乗り切る覚悟と、言葉の力の素晴らしさを伝えて行く覚悟を持つことができました。

退職に当たり、つたない想い出を書かせていただきましたが、遅い精神を育んでくれた岩教大へのお礼としたいと思います。

## 百周年に向けて

副理事長

松野 岳彦

北海道教育大学岩見沢校は、令和五年に創設から百年を迎えます。

北海道教育大学岩見沢校の歴史は、大正十二年（一九二三年）に遡ります。大正十二年といえは、関東大震災があつた年です。震災が起こつたのが九月。その半年前の四月、「北海道庁立実業補習学校教員養成所」として創立されたのが始まりです。

そして、昭和十年に「北海道庁立青年学校教員養成所」と改称し、昭和十九年には文部省直轄の「北海道青年師範学校」へと昇格しました。

その後は、昭和二十四年に「北海道学芸大学札幌分校岩見沢分教場」、昭和二十九年に「北海道学芸大学岩見沢分校」、昭和四十一年に「北海道教育大学教育学部岩見沢分校」、平成五年に「北海道教育大学教育学部岩見沢校」、平成十六年に「国立大学法人 北海道教育大学岩見沢校」と六度に渡る校名の変遷があり、現在に至っています。

教員養成大学として長い歴史を経験してきましたが、北海道教育大学の再編にともない、平成十八年に岩見沢校の教員養成課程の募集が停止され、「芸術課程、スポーツ教育課程」が

設置されました。そして平成二十六年から「芸術・スポーツ文化学科」として再出発しました。現在の学生たちは、自分の強みを生かして社会に貢献できる人材になることを目指して大学に入学してきます。ですから、音楽・美術の高度な芸術センスや、卓越したスポーツ技能を活かし、文化としての芸術・スポーツを通して様々な形で地域に貢献しています。

教員養成課程が廃止されてからは、大学卒業後の進路も大きく変わり、公務員・一般企業で活躍する卒業生が大半を占めるようになりました。

一方、少数ではありますが、中学・高校の音楽や美術、保健体育の教員免許取得を目指し勉学に励み、教員として活躍する卒業生もいます。

このような中、教員をはじめ、公務員・一般企業・経営者等、様々な分野で活躍する青陵会員が、令和五年に一堂に会して創設百年を祝い、親睦や情報交流する機会となるよう、今年度百周年記念事業に向けての準備委員会を立ち上げたところです。大きな節目となる二年後をどうぞ楽しみにしてください。

時代の変遷と共に様変わりしてきた北海道教育大学岩見沢校ですが、今後も更なる深化・発展を続けていくことを願っています。

# 支部だより



一年をふりかえって  
オホーツク支部 事務局長  
水野利幸  
(興部町立興部小学校)

令和二年度のオホーツク支部は、一月十日の支部総会で始まりまし

北海道教育大学青陵会会長早瀬公平氏と本部理事長小関文雄氏をお招きして行い、令和元年度の活動報告及び令和二年度の活動方針が承認されました。その後、四月より現職会員は七十八名・OB会員が二十名となりました。そのうち、校長五名、教頭二名、主幹教諭一名となっております。新入会員の減少により、年々会員数が減ってきており、管理職も減少傾向にあります。支部の規約では、管理職（主幹教諭を含む）はいずれかの役員に所属することになっており、人材発掘が重要課題となっております。

## 【今年度の主な活動】

- 一月 支部総会・研修会・交流会
- 二月 「青陵オホーツク」発行
- 五月 第一回役員会（延期）
- 六月 「青陵オホーツク」発行
- 七月 第一回役員会
- 夏季研修会・交流会（中止）

- 十月 管理職研修会
- 十一月 第二回役員会
- 十二月 「青陵オホーツク」発行

一月十日の研修会において、道青陵会会長と理事長より、道青陵会の現状や情報をいただくなど、充実した一年になると思いました。しかし、コロナウイルス感染症の流行により、役員会を延期したり、夏季研修会・交流会を中止したりと活動内容を大きく変更することとなりました。特に、現職だけではなくOBにも参加していた交流会を中止したことは、とても残念でした。それでも、十月には、オホーツク支部近隣の根室支部長・宗谷支部長・上川支部事務局長（在学時の研究室先輩諸氏）の皆様と、電話で短い時間ではありましたが、情報交流させていただき、十一月の役員会で還流することができました。

最後になります。令和三年度は人材発掘と各種研修会を充実させるとともに交流会を開催して参りたいと考えております。また、本部、各支部の皆様とのつながりも大切にしていきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願います。



新たな活動スタイルを  
指導主事支部 事務局長  
瀬越義範  
(北海道教育庁)

指導主事支部は、札幌市、長沼町、帯広市、京極町の教育委員会、空知教育局、石狩教育局、後志教育局、根室教育局、北海道立教育研究所、学校教育局の指導主事で組織しております。現在の会員数は十七名で活動しています。

さて、私達の仕事は大きな転換点を迎えていると感じています。学習指導要領の改訂をはじめ、一月には、中央教育審議会が令和の日本型学校教育の構築について答申するなど、学校教育のスタイルや考え方が急速に変わろうとしています。それらの概要や重要なポイントなどについて理解を深めていかなければなりません。併せて、一層計画的かつ効率的に業務を進めていくことが重要と考えています。

これまで指導主事支部は、年に三度ほど札幌市に集まり、研修と懇親を深めてきました。国や道の情勢、管内や学校の実態に応じた指導助言の在り方、業務を推進する上での悩

みなどを共有するなど、全道にいる青陵会会員で力を合わせながら活動してきました。私自身も、新学習指導要領の改訂の趣旨や各種事業の目的や効果的な取組など、分からないこと、今ひとつ理解を深められないことについて、先輩方にアドバイスをいただき、所属先での業務に役立っていたことを記憶しています。

しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響から、昨年度後半から研修などの活動を自粛し、一度も集まっていません。総会も書面開催としたところです。

これまでの活動がままならない現在の状況を鑑み、事務局では研修等の充実に向け、書面や遠隔会議の活用を模索しているところですが、実際には至っておりません。また、事務局が新会員と連絡をとり、困っていることなど意見交流をしています。が、支部全体の取組とはなっておりません。

それぞれの職場で日々奮闘している会員の知識と経験を結集し、連帯感をもって業務に当たることができるよう、新たな活動スタイルを模索していきたくと考えています。

# 卒業生代表のことば



芸術・スポーツビジネス専攻  
手嶋 勇斗

「自ら地域の活動に参加し、企画する力を養う」という思いを持って、大学に入学した頃が鮮明に甦ります。卒業を迎え、大学四年間を振り返ると、良い環境に囲まれた日々を過ごし、交友関係を広めながら多くの経験を得られた感じがしています。

私は大学進学と共に、兵庫県から北海道に移住しました。当然、初めは気楽に話せる人は一人もいませんでした。しかし、岩見沢校の学生は、優しく個性豊かで、すぐに馴染むことが出来ました。

一人一人が自分の考えを持ち、他人の価値観を理解してくれる環境が私の周りにあった為、初心を忘れず課外活動に参加できたと思います。

自分の行動全てに責任があり、信頼関係が構築された上で物事は進んでいることを活動経験から学びました。

新たな場所での生活で、体得したものを活用していくことに期待を寄せています。この四年間の思い出を忘れず精進していきます。



音楽文化専攻  
藤内 海登

岩見沢での四年間の音楽漬けの日々も、もうすぐ終わりを迎えようとしています。私にとつての大学生活最後の年に、新型コロナウイルスが世界中を一変させるとは想像もしていませんでした。相次ぐ演奏会の中、止やオンラインレッスンの導入など、私達の音楽活動にも大きな影響が出てしまいました。

しかし、その状況下でも出来ることを探り、対面での学びの再開に向けて日々を大切に過ごすことができたと思っております。

私はこの四年間、専攻楽器であるピアノの他、副科のヴァイオリンや合唱にも取り組みました。昨年度のPMFでは、三十周年を記念した演奏会に合唱で出演する機会を得ました。世界で活躍する音楽家の方と同じ舞台に立てたことは一生忘れられない経験です。

また、毎年行っている定期演奏会には合唱や管弦楽で参加させていただき、日常の授業で取り組んできた成果を岩見沢・札幌の多くの方々に聴いていただけたと思っております。

私がこのような充実した時間を過ごすことができたのも、青陵会の皆様のお力添えのおかげです。この場

をお借りして感謝申し上げます。新天地でもこの経験を活かし、周りの方々への感謝を忘れず精進していきます。



美術文化専攻  
栗田 優花

大学入学から卒業までを振り返ってみると、四年間は長くも短くもあつたように感じます。美術という道で知識や教養を学ぶ中、自分自身向き合い、友人と切磋琢磨し、駆け抜けるように過ごした日々には強い思い入れがあります。各々の学びや活動をサポートしてくださったこの大学でこそ送ることのできた日々だと感じていきます。

「美術の女神に取り憑かれている」。私が所属するゼミの教授がおっしゃってくださった言葉です。私たちがこの先美術から離れたとしても美術の観点から物事を見ることをしてしまふといった意味の言葉で、卒業をひとつの終わりと感じていた私はこの言葉に胸を打たれました。私たちは卒業後も、この場所で得たそれぞれの学びや経験を自分自身に秘めて進路を行くのだと思えました。また、秘めるだけでなくそれらを活かして行動していきたいと思えます。

私を成長させてくれた教授や友人、

周囲の方々への感謝の気持ちをお忘れず、これからもより一層成長へと精励していきたいです。



スポーツ文化専攻  
坂口 昌也

はじめに、新型コロナウイルスの感染が世界中で流行しており、未だ収束が見えないなか、現場で危険と隣り合わせで日々一つでも多くの命を救おうと懸命に働いてくださっている医療従事者の皆様から敬意を表します。最大限の感染予防に努めるとともに、一日も早く平穏な暮らしを取り戻せるよう心から願っております。

このコロナによって、四年間学んできたことがあらためて世の中で欠かせないものであると実感しました。所属するアウトドア・ライフコースの実習が行えない、音楽の学生の練習する音が以前よりも聞こえない、など寂しくなることが多くありませんが、この喪失感こそが芸術やスポーツが持つ人の心を豊かにする力であるのだと確信しました。

岩見沢校で学んできて感じてきたことを忘れずに、社会に出てから芸術・スポーツの持つ力を新たな環境に取り込み、少しでも社会を豊かにしていくことで還元したいです。

# 各 学 科 の 活 動 状 況

## 「芸術・スポーツビジネス専攻の日常活動」

黒川 雄 星

芸術・スポーツビジネス専攻は今年度新型コロナウイルスの影響もあり、実習はもちろん、対面での授業もかなりの規制が設けられた。予定よりも一か月遅れて始まった前期中は、一部のゼミの活動を除くすべての講義がオンラインというスタイルで開講された。後期は対面講義も開講されたものの、依然としてオンライン主体の日常は変わらなかった。

そんな中、一年生は後期に授業の一環として「岩見沢新コロナPOWZONプロジェクト」を実施した。このプロジェクトは、新型コロナウイルスの発生により地域が抱えている課題に対してアートの観点からアプローチすることを目的として実施されたものである。本校の美術文化専攻二年生と連携し、各店舗の個性や雰囲気を生かしたデザインのアイテムや装飾を行った。展示に合わせ、協力店舗のPR動画を作成し道教大岩見沢校の公式YouTubeチャンネルにて配信も行っている。

打ち合わせは基本的にZoomを利用して遠隔で行い、新型コロナウイルス禍で企画を成功させる工夫について話し合っ

た。他専攻の先輩と、プロジェクトの企画から広報、実行までを行った経験は貴重なものであり、入学して間もなく外出自粛を強いられた一年生が本格的に大学生として歩みだす第一歩となった。ある学生は、「今後はいわゆる『M1コロナ』の状況下で、大学が街と交流できる地域おこしの在り方について考えていきたい。」と話していた。

毎年三年生がビジネスに関する理解を深めるための研修旅行である「ビジネスストレンド」は、今年度は中止となった。国内は九州、国外はオーストリアに行く予定で計画していたが残念である。また、来年度よりカリキュラムは各研究室に分かれ、より専門性の高い研修を予定している。現段階での実施は不透明であるが、決行を祈るばかりだ。

今年度は未曾有の緊急事態宣言によって、予期せぬ大学生活を送ることになった。その中で、大打撃を受けている芸術やスポーツ業界を立て直す仕組みについて検討した。我々は、文化を世の中につなぎ、喜びを提供する者として、この情勢と向き合いながらそれぞれの研究を深めていきたい。

## 「音楽文化専攻の日常活動」

北村 日 生

音楽文化専攻では、必修科目や教職科目の他に音楽の専門的な授業を受講することができます。ソルフェージュや音楽理論などの音楽の基礎となるような授業をはじめ、実技レッスン、オーケストラ・吹奏楽の合奏、室内楽等の本格的な音楽の勉強をすることが出来ます。

音楽文化専攻には教職の道を志す者がいることはもちろんのこと、プロの音楽家、一般就職、大学院進学や海外留学を考えている人も多いため、本格的な分野の授業を受けられるという事はとても幸せです。札幌交響楽団の先生方のレッスンを受けられる事や、今の時代を駆け巡っている教授や准教授の先生方の下で音楽を学べるという事も、この大学の強みと言えます。

音楽文化専攻の学生は日々授業を受けるだけではなく、自分が専攻している楽器や副科として受講している楽器などの練習も行っています。個人的な練習はもちろんのこと、各自のコンクールや演奏会に向けて練習を行い、日々研鑽を積んでおります。その他に例年では学外での演奏活

動も幅広く行っており、岩見沢市内や札幌近郊の公共施設や駅、病院、学校等、様々な場所で演奏をさせていただいています。

今年度は新型コロナウイルスの影響のため前期は全ての講義がオンライン、後期になっても実技系の講義の一部のみ感染症対策を行った上で様々な制限を設けて対面形式となり、慣れない日々が続きました。これまでに「当たり前」と思っていた大人数での合奏や合唱、アンサンブルの授業、毎年行っていた演奏会も通常通り行うことができず心苦しいときもありました。しかし、これまでと同じようにできないからこそ、学生の間でリモート合奏を企画したり、「地域プロジェクト」の一環として行ったオンライン音楽祭「LINE」では、企画や演奏、動画編集まで学生が担当しYouTubeで配信したりと、新しい挑戦をすることができたと感じています。

青陵会の皆様のご支援があるからこそ、音楽と真摯に向き合い、日々精進できていると思います。また演奏会を開催できるようにしましたら、私たちの音楽をお届けできるよう、常に感謝の気持ちを忘れず、精一杯勉学に励んでいきたいと思っております。

「美術文化専攻の日常活動」

川合 里 歩

私たち美術文化専攻は「美術・デザインコース」「書画・工芸コース」「メディア・タイムアートコース」「美術文化教育コース」の四つのコースに分かれ、二年生からは彫刻、書、工芸、という伝統的な分野から現代美術、映像メディア、デザイン、イラストレーションなどという比較的新しく広範囲的な表現分野と、アートマネジメント、美術理論、美術教育という理論分野とさらに学びたい分野ごとの研究室に所属し学んでいます。

その学びの成果を発表する場として、学生が主体となつて展覧会の企画・運営をしたり、違う研究室の学生でグループを組み一つの作品を制作したりと自分とは違う考え方や表現の仕方に触れて、より多彩な表現の理解に向けて活動しています。写真はメディアコンテンツ研究室での学生同士の意見交流の様子です。学生同士で作品を講評し合うことも多くあり、自分の作品や考え方をよりブラッシュアップすることが出来ます。

また、必修授業として全員が同じ授業を取っているため先輩に機材の使い方を教えてもらったり、後輩に作品撮影を手伝ってもらったりと、

同じ分野を学ぶものとして学年を超えた交流があります。普段は使わない技法や考えたことがない見方に触れることができるため研究室で過ごす時間は自分の世界をさらに広げる大切な機会になっていきます。

今年度は学校に通うことが難しく思うように制作ができず、発表の機会も減り、表現者としてはとても苦しい一年でした。しかし悪い面だけではなく、家にいながら美術作品を鑑賞できるオンライン展覧会やSNSでの宣伝がより活発になるなど新しい美術との触れ合い方が発見できたように思えます。このような時だからこそ美術から面白さや癒しを感じてもらい、心を安らげる一つの手段として美術がより身近な存在になれるように努力していきたいと思えます。



「スポーツ文化専攻の日常活動」

久保田 千 夏

スポーツ・コーチング科学コースでは、競技スポーツやフィットネス、アダプテッド・スポーツなど、それぞれの特性を理解・研究して、実践を通し地域の未来を開拓していくために日々勉強や部活動に励んでいます。

今年度は、新型コロナウイルスの影響もあり、ほぼ全ての講義が遠隔となつてしまいました。中々仲間と会う機会がなく、寂しい思いもしましたが、オンラインやオンデマンドを駆使して学びを深めてきました。直接学べないことは不便ではありましたが、普段以上に各々の学びに対する姿勢が求められた一年でした。

部活動に関しても、思うように活動できず苦しい期間が続きました。私は剣道部のマネージャーとして活動しています。

しかし、今年度の大会はすべて中止。四年生の先輩方は不完全燃焼での引退となつてしまいました。感染症対策としてマウスガードとマスクをつけ、換気をしてメニューを工夫

して練習してきましたが、その練習の成果も発揮することができませんでした。現在は、原則全部活動が活動禁止となっており、禁止期間も決まっています。先行きが不透明な中での活動となりますが、安全に部活動が再開できると判断されるまでは、自分たちでできることを続けていくしかないと思っています。スポーツに関して学んでいるからこそ、この期間に自分たちがやるべきことは自ずと見えてくるはず。スムーズに活動再開ができるよう、普段の学びを生かしていきたいです。

このような状況に置かれて、改めてスポーツできる環境のありがたさを実感しています。「コロナだからやらない」ではなく、「コロナのなかでどうやってやろうか」と考える姿勢がスポーツ文化専攻の学生に求められていると思います。

私たちがこうして前を向いて活動できるのも、医療従事者の方々が最前線で働いてくださっているおかげです。医療従事者の方々へ心からの敬意と感謝を表し、新型コロナウイルスが一日も早く終息して日常に戻ってくることを切に願っています。

# 事務局便り

理事長 小 関 文 雄

全国・全道各地でご活躍の青陵会  
会員の皆様こんにちは。

今年度は、昨年から続く新型コロナ  
ウイルス感染症が世界的に猛威を  
振るい、多くの方々の尊い命が奪わ  
れました。また、長期に及ぶ療養生  
活を余儀なくされた方々が数多くお  
り、現在も苦しんでいる方がいらつ  
しゃいます。青陵会の会員の皆様の中  
にもいらつしゃると思います。亡  
くなられた方々に哀悼の意を表しま  
すとともに、療養生中の方々の一日も  
早い快復を祈っております。

さて、このような状況にあつて北  
海道教育大学青陵会の活動も多くが  
中止や延期に追い込まれ、なかなか  
前進しない状況の一年間でした。

その中で、この一年で取り組んだ  
ことや課題となつていていることにつ  
いて本会報を通してお知らせしたいと  
思います。

一つは、令和二年度の総会につ  
いてです。開催について役員会で検討  
を重ね、最終的には各支部に文書に  
よる提案と議決書による承認の形と  
なりました。結果的には五月二十一

日に全支部の承認をいただき、総会  
の代わりといたしました。

今年度の主な項目としては、同窓  
会創立百周年に向けた準備、同窓会  
今後の在り方検討委員会最終答申の  
具体化、退職された会員も一般会員  
として継続する啓発をすること、研  
修誌「望岳」を改訂し、頒布したこ  
と、会員名簿を冊子からデータにす  
ること、庶務部を総務部にしたこと  
などです。

その他、会則の改定、個人情報保  
護の適正な取扱いの制定、各種会議  
への旅費等に関する内規の制定を行  
いました。

二つ目は、学生活動支援事業を行  
つたことです。本事業は平成二十二  
年から始めた事業で今回が十一回目  
となります。目的は母校の学生が行  
う活動に金銭的な支援を行うことで、  
今年度は五団体を支援することとし  
ました。詳しくは今後ホームページ  
や報告書で会員の皆様にお知らせ  
してまいります。

課題としては、第一に会員数の減  
少があげられます。母校から教員に  
なる学生の数が限られており、今後  
教員だけの同窓会は成り立たなくな  
りますので、その在り方を最終答申  
で示しましたが、実現には多くの課

題と意識改革、加えて会員の皆様の  
ご理解・ご支援が必要です。令和三  
年度は少しでも前進させてまいりま  
すので、皆様のお力をお貸し下さい。  
最後に良いお知らせですが、石狩  
支部から二名の指導主事受験者を出  
していただきました。会員数が減少  
する中、行政で活躍できる人材を輩  
出していただいたことに感謝します。

# 編集後記

会報一〇七号をお届けいたします。

コロナ禍により、本部・各部、各部の  
活動や研究会等が例年通りには行うこ  
とができない中、本号の発行にあたり、玉  
稿をお寄せくださった皆様に心よりお礼  
を申し上げます。先号に続き発行が例年  
より一ヶ月ほど遅れてしまい申し訳なく  
思っておりますが、無事、ノルマの年2  
回の発行をすることができ、担当として  
は正直ほつとしております。

紙面づくりがマンネリにならないよう  
工夫をしていきたいと思っておりますので、良  
い情報やアイデアがありましたらぜひ  
お寄せください。

## 〈広報・情報発信担当〉

・部長 松 縄 義 道

(北竜町真竜小学校)

・副部长 野 村 智 久

(三笠小学校)

江 幡 佳 代

(三笠小学校)

・部 員 一ノ瀬 健太郎

(赤平中学校)

小野寺 英 樹

(深川中学校)

沢 泰 宏

(岩見沢第一小学校)

## 北海道教育大学青陵会 (令和3年度総会・研究大会・教育懇談会のご案内)

日 時 令和3年5月15日(土) 13:30~  
会 場 北海道グリーンランド ホテル・サンプラザ  
会 費 5,000円(予定)  
※ 総会(各支部代表者) 13:30~15:00  
研究大会(講演会) 15:15~16:45  
教育懇談会 17:00~18:30

なお、コロナ禍の状況によっては中止する場合がありますので、  
ご承知おき下さい。